

# 文献一覧

本文の最後に「文献」という章を設けます。ただし、通常の章とはちがひ、セクション番号をつけません。本文で引用した文献はすべてここに掲げます。

文字は、本文よりも1段階小さいものを使います。1行にひとつの文献を書きます。行の先頭を全角2字分「ぶら下げインデント」します。Wordを使用する場合はメニューの「書式」→「段落」で「最初の行」を「ぶら下げ」、「幅」を「2字」に設定してください。

文献は著者名のアルファベット順にならべます。著者名がアルファベット以外の文字で書かれている場合は、その言語の慣習にしたがってローマ字化したものを考えて、その順序にしたがってならべてください。おなじ著者の書いた文献のなかでは、出版年の順にならべます。

個々の文献の情報の書き方は、以下の書式にしたがいます。ただし、以下の書式は、本文が日本語で書かれている文献を対象としたものです。英語その他の言語で書かれた文献については、「日本語以外の文献」の項をみてください。

一般的な形式はつぎのとおりです。

【書籍・報告書】著者（出版年）『標題』出版社。

【編書中の論文】著者（出版年）「論文標題」編者『編書標題』出版社，pp. ページ範囲。

【雑誌論文】著者（出版年）「論文標題」『雑誌名』巻号，pp. ページ範囲。

【学位論文】著者（提出年）『標題』（卒業論文・修士論文・博士論文の別（年度がわかればそれも）、提出先機関名）。

## 著者等について

- 著者が複数いる場合は、ナカグロ（・）で区切ります。多数の著者がいる場合も、全員の名前を省略せず書きます。
- 名一姓の順になっている著者名については、姓を前に出し、その後に全角コンマをおき、その後に名のアルファベット頭文字を記してピリオドをつけます。たとえば「ポリー・ザトラウスキー」は「ザトラウスキー，P. 」とします。
- 編者・監修者については、著者と同様に書き、最後に（編）（監修）をつけます。

## 出版年について

- 増刷・改版を重ねた書物の場合、奥付にいくつもの日付が載っていることがあります。このような場合は、内容の改訂が最後におこなわれた年を採用します。たとえば1980年出版の本の増補改訂版が1989年に出てその後増刷を重ねている場合、出版年は「1989」とします。
- 出版年がわからない場合は（n.d.）と書きます（no date の略）。
- 近々出版になることが決まっている文献の出版年は（forthcoming）と書きます。

- 著者名・出版年がまったく同一の文献については、出版年に "a, b, c, ..." のアルファベット小文字をつけて区別します。たとえば (2000a) (2000b) のようにします。

## 標題について

- 論文の標題は「」、書籍や雑誌の標題は『』で囲みます。
- 特に注記すべき事項がある場合は、標題のあとにカッコでくくって示します。たとえば、報告書の性格、翻訳者名、叢書名など。

## 出版社について

- 日本国外の出版社については、所在地をカッコでくくって示します。所在地は（都市名，州名など，国名）の順で書きます。州名・国名には、一般に使われている略号を使ってかまいません。また、著名な都市の場合には、州名や国名は省略して、都市名だけでかまいません。たとえば「East-West Center (Honolulu)」のようにします。
- 日本国内の出版物でも、小規模な研究会や民間の研究所、その他識別に困る可能性がある場合には、所在地を示します。
- 個人が発行した文献については、その個人を出版社とみなします。その場合、その人の所属をカッコでくくって示します。
- 一時的な組織（たとえば特定の研究のための研究プロジェクトなど）が発行した文献については、その組織を出版社とし、そのあとにカッコでくくって代表者とその所属を書きます。
- 雑誌の場合、通常は出版社を書きません。これは、雑誌の創刊の際には重複しないように名前をつけるのが原則となっているために、雑誌名だけでたいてい区別できるからです。しかし、まれに雑誌名が重複しているケースがあります。その場合には出版社または発行者をつけて区別します。たとえば「『文学論集』10, 佐賀大学文理学部, pp. 24-34」のように書きます。

## 雑誌の巻・号について

- 「巻」「号」「集」「Vol.」「No.」等は省略します。漢数字やローマ数字で巻・号が表されている場合も、すべてアラビア数字 (1, 2, 3, ...) で書きます。
- 巻と号 (Vol. と No.) の2段階からなる番号については、号数を半角カッコでくくります。たとえば「33巻4号」は「33(4)」のようにします。ただし、巻ごとのとおしのページ番号を持つ雑誌の場合は、号数は省略してかまいません。
- 2号以上が合併されてひとつの号にまとまっている場合は、号数を半角スラッシュ (/) で区切って列記します。たとえば33号と34号の合併号は「33/34」と書きます。10巻1号と10巻2号の合併号は「10(1/2)」と書きます。

## 通常の文献以外のもの

論文で引用する情報は、永続的に参照できるもので、確実に同定できるものであることが原則です。ですから、下記のようなものはなるべく引用するべきではありません。おなじ情報が本や雑誌にのっているなら、そちらを引用してください。

ほかで入手できない情報であれば、やむをえず下記のようなものを引用することになります。その場合は、以下の規則にしたがってください。

- 新聞記事  
新聞にはいろいろな版があって特定がむずかしいので、縮刷版をつかう。縮刷版なら通常の書籍と同様にあつかえる。
- インターネット上の情報  
著者（年号）「**標題**」<URL> 閲覧日付.  
の形式で文献一覧に載せる。（インターネット上の情報は頻繁に改訂されたりなくなったりするため、閲覧日付が重要になる。The Internet Archive <<http://www.archive.org>> などで過去の情報を探すときに使う。）複数の URL があるときは、永続的で単純なものを選ぶ。  
なお、冊子体の雑誌論文と完全に同一内容のファイルを出版社等が提供するいわゆる「電子ジャーナル」については、冊子体と同じとみなして、通常の雑誌論文として記載してよい。
- 口頭発表  
学会報告の要旨集は、ふつうの雑誌と同様にあつかって文献一覧に載せる。  
発表の際の配布資料は、文献一覧には載せない。どうしても言及する必要がある場合は、文中または脚注で紹介する。
- 未発表の論文  
著者（年号）「**論文名**」 著者名（所属）.  
の形式で文献一覧に載せる。
- 私信  
文献一覧には載せない。どうしても言及する必要がある場合は、著者の了解をえたうえで文中または注で紹介する。

## 日本語以外の文献

本文が英語で書かれている文献についても、日本語文献と基本的におなじ規則を適用します。ただし、つぎの点がちがいます

- ふたりの共著については、著者名を "and" または "&" で区切ります。
- 3人以上の共著については、著者名をコンマ (,) で区切り、最後のひとりの前に "and" または "&" を置きます。
- (編) のかわりに (ed.)、(ほか) のかわりに (et al) を使います。
- 論文標題は2重引用符 “” で囲み、ピリオドをつけます。
- 書籍・雑誌・学位論文の標題はイタリック体で書き、ピリオドをつけます。
- 記号類は半角のものを使います。記号の前後のスペースの入れ方 (前回資料参照) に注意してください。

その他の言語の文献を引用する場合については、上記の日本語／英語のルールを準用するか、各言語圏の標準のルールを使用してください。ただし文献情報の各要素を配列する順序については、どの言語の文献についても上記のルールを適用します。

## 文献表のサンプル

- 文化庁文化部国語課（編）（2001）『国語に関する世論調査：家庭や職場での言葉遣い』財務省印刷局.
- Gorrell, R. M. and Laird, C. (1976) *Modern English handbook* (6th edition). Prentice-Hall (Englewood Cliffs, NJ, US).
- Kaplan, R. B. (1966) "Cultural thought patterns in international education." *Language learning*. 16, pp. 1–20.
- 三原祥子・影山陽子・澤田尚美・矢部まゆみ（2002）「教師の自己研修における共同アクション・リサーチの可能性：PAC分析による検証」『2002年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会，pp. 185–192.
- Molholt, G. (1992) "Visual displays develop awareness of intelligible pronunciation patterns." Brown, A. (ed.) *Approaches to pronunciation teaching*. Macmillan (London).
- 麦谷綾子・林安紀子・桐谷滋（2000）「養育環境にある方言への選好反応の発達：5～8カ月齢乳児を対象に」『音声研究』4(2), pp. 62–71.
- 長友和彦（2002a）『第二言語としての日本語の自然習得の可能性と限界』（科学研究費補助金研究成果報告書：研究課題番号 12878043）お茶の水女子大学大学院日本語教育コース.
- 長友和彦（2002b）「新シラバスはこうして生まれた」『月刊日本語』15(3), pp. 6–9.
- ネウストプニー, J. V.・宮崎里司（編）（2002）『言語研究の方法：言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために』くろしお出版.
- 小河原義朗（1997）『外国人日本語学習者の発音学習における自己モニターの研究』（博士論文，東北大学大学院文学研究科）.
- 才田いずみ（2001）『双方向通信による遠隔日本語学習支援システムの研究』（科学研究費補助金研究成果報告書：研究課題番号 11680307）才田いずみ（東北大学大学院文学研究科）.
- 才田いずみ（2002）「聞くことと話すことの指導」縫部義憲（編）『多文化共生時代の日本語教育：日本語の効果的な教え方・学び方』瀝々社，pp. 111–126.
- 鈴木淳子（2002）『調査的面接の技法』ナカニシヤ出版.
- 田中重人（n.d.）「コーディング支援プログラム autocode.awk」<<http://www.sal.tohoku.ac.jp/~tsigeto/autocode/>> 2013年9月18日閲覧.
- カッケンブッシュ知念寛子（2002）「文字・語彙の指導」縫部義憲（編）『多文化共生時代の日本語教育：日本語の効果的な教え方・学び方』瀝々社，pp. 78–92.
- 宇井美代子（2001）「ジェンダー・性役割」山本真理子（編）・堀洋道（監修）『心理測定尺度集 I：人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉』サイエンス社，pp. 137–172.
- 内山潤（2002）「韓国語日本語学習者の格助詞の習得に関する研究」『言語科学論集』6，東北大学大学院文学研究科言語科学専攻，pp. 37–48.